

ふるこもただ微なれば、即ち氣怯にして弱し。過ぎたるこ及ばざるこは與に皆病たるのみ。切に規矩に循ふを要す。格法は自然に本く。氣韻は必ず其の生意を全うす。此に得れば備り、此に失へば病む。……其れ用筆簡易にして意全き者あり。巧密にして精細なる者あり。或は氣格くして筆迹雄壯なる者を取り、或は順快にして流暢なる者を取る。縦横變用、皆筆に在り。……凡そ用筆は先づ氣韻を求め、次に體要をこり、然る後に精思。若し形勢未だ備らざるに便ち巧密精思を用ふれば、必ずその氣韻を失ふ。氣韻を以てその畫を求むれば、則ち形似は自ら其間に得。……其の筆太だ麗なれば即ち其理趣寡く、其筆太だ細ければ即ち氣韻を絶つ。一皴一點、一勾一斫、皆意法ありて存す。若し古の畫法に従はず、ただ山を寫眞すれば、遠近深淺を分たず。乃ち圖經なり。焉ぞその格法氣韻を得んや。凡そ畫に八格あり。石老ひて潤ひ、水淨くして明かに、山は崔嵬を要し、泉は宜しく洒落なるべく、雲烟出沒し、野逕迂廻し、松は龍蛇に偃し、竹は風雨を藏す。(韓拙、山水純全集)

水墨畫の理論的基礎はほほ以上の如くであるが、材料はこの理論とよく一致するものである。

太い軟毛筆に墨を含まして、紙を突つて見る。靜かに突つて居るこ、靜かに墨が滲み出す。更に突く。紙に穴があく。幾度も幾度も突つて居るこ穴がだんだん大きくなつて、一つ眼小僧のやうになる。面白い。又別なころを突つて居る。今度は周圍りのただれた、ぐぢやぐぢやな、おできのやうな氣味の悪い穴があく。幾つも穴をあけて居るうちに、紙はめちやめちやになつてしまふ。而しながらそれは、女の肉體なごに觸れる如く不思議である。

紙さいふ奴は、そのやうに軟らかくデリカーである。トアールのやうに、男性と男性とのやうな觸覺ではない。唯、單純直接、だから一こ一こが融合すれば紙本墨畫は上乘なものになるであらう。(森田恒友氏、紙本墨畫)

かくの如く紙は筆墨に對する感覺が鋭敏緻密である。筆は水墨をふくみて些少なる運動をも、その柔軟なる毛によつて傳へるこも出来る。墨はこの二つの材料によつて、内省的

にして微妙なる自己の性情をあらはす事が出来る。西洋畫は遲鈍な畫布の中に、ねばり強い繪具を、毛の硬い刷毛で塗抹して行く。所要の效果を得る迄は、色の上に色を重ねて行く。訂正に訂正を重ね、效果に效果を積み行く行方は、明かに建設的である。水墨畫が一切の足場を撤去して、ただ一氣に最後の結果に直進するのこ全く趣を異にしてゐる。水墨畫はその一筆一筆が最後である。その效果は合成したものでない。南畫の米點の推積は、西洋畫の建設的なるこ似た觀があるが、これは訂正につぐに訂正を以てするのではなくて、一點一點直にその結果を指してゐる。今假に西洋畫を計画的必然的間接的、即ち説明的なる語で表し、之に對して水墨畫を著しく對立せしむれば、衝動的偶然的直接的、即ち暗示的なる。

次に水墨はもこ墨を水の力で活かして流動化するものであるから、ここに二箇の重要な視點がある。一は墨に關し、即ち色彩の世界より光度の世界への轉向、第二は水に關し、即ち變幻融即する形態の世界の表象である。前者は一切の色彩を衝動化し、最も沈着素朴に自然を捉へて、其の煩雜を多言を執着を離脱して、純粹にして内省的なる内觀の世界

に入れるものである。「林泉高致」に「山水を見るにも亦體あり。林泉の心を以て之に臨む時は則ち價高く、驕侈の目を以て之に臨む時は即ち價低し。」は、之を他面より見たるものである。第二の形象融即の觀察はもこ形に定形なしの觀察より出で、また同時に流動して無礙なる意識の流に應ずる。かくて水墨畫は鋭敏なる材料を媒介して、五彩の光を有し、力微つて光自ら浮び來る沈潜を個性の生動を示すものである。

最後に水墨畫の特色ある境地は、ほほ沈着透徹及び直接の三とする事が出来る。沈着はその成立に於いて寂照、存立に於いては靜寧である。透徹はその成立に於いては清淨、存立に於いては涼爽である。直接はその成立に於いては簡明、存立に於いては端正である。而してこの三者を通じて敬虔を清淨さを持つてゐる。

師傳に曰く八活さいふこあり。一に活筆、二に活紙、三に活硯、四に活水、五に活墨、六に活手、七に活神、八に活晷なり。一の活筆は水中に數刻經たる筆は運るこ弱くして、又却つてするこなり。是を嫌ふ。新なる筆の禿ざる壽毛有るを活筆さいふなり。活紙は絹紙こもに新なるを云ふ。陳きは攀水の力弱くして筆ここほる。是

を嫌ふべし。活硯は研りよごれたる硯は硯の色を失ふ。よく洗ひそそぎて用ふべし。活水は新たに汲みたるを云ふ。且に汲みたるは暮に用ひず、夕に汲みたるは晨に用ふべからず。必硯中泡を生ず。時に臨んで新に汲みて用ふべし。活墨は用ふるに臨んで施し研るを云ふ。兼ねて研り置きたるは、豔光を出さず。活手は安閑無事なり。始て手を用ふるをいふ。自ら墨を研り、或は自ら水を汲み、總て力を用ひ勞する事勿れ。腕凝倦して回旋につたなし。是を嫌ふ。活神は神々靜かにして思を一つにし、泰然として筆を取るべし。微しも心他に馳せ、眼外のものに誘るる時は、筆力ゆるまり、氣韻ある事なし。活晷は晴天なり。清明なるを云ふ。墨蒸ならざる時に、筆を取るべし。必ず忽忽としてなす事なかれ。是を八活といふ。(大岡春卜、畫工潛覽)

若し水墨畫の境地を儒教思想に於いて言へば、孔子の「一貫の道」の心理的内容をなすものであり、また中庸の精神を爲すものである。中庸は數量的の中間でなくて、性能を批判して正しきを取るの謂である。故に中庸を解して「偏せざる之中を中と謂ひ、易らざる之中を庸と謂ふ。中は天下の正道、庸は天下の定理。」といふ所以である。正しくして永遠なるが

故に、敬虔にして清淨なる批判を要し、この批判には洗練と集中と親和とを要する。かくて中庸の徳に集中と親和と洗練とを加ふれば、この境地は「寂」である。寂の境は老境である。寂は敬虔にして集中し、直接にして透徹せるものであるから、それは水墨畫の境地と全く一致する。かくて水墨畫の制作と鑑賞の境地は、敬虔なる中庸即ち寂の境地であり、東洋畫の精神を最も明白にせるものなることを明かに知り得る。されば東洋畫の特質を行く所まで行かしたる表現形式を、吾等はこの水墨の中に見得るのである。

大正十三年十月十七日 印刷
大正十三年十月十九日 發行
〔東洋堂校印〕
一定價貳圓八拾錢

著者 金原省吾

發行者 東京市外西大久保四五九
橋本福松

印刷者 東京市麹町區紀尾井町三
福王俊禎



版權所有

發行所 東京市外西大久保四五九
振替東京三五三四〇番 古今書院

東京市外西大久保四五九
古今書院發行所

75205
長

武田祐吉著	上代文學の神と神を祭る者の文學	研究第一編	定價貳圓參拾錢
宮地直一著	神祇史の研究		定價貳圓九拾錢
金原省吾著	東洋畫概論		定價貳圓八拾錢
藤澤直枝著	日本歷史精要		定價五圓貳拾七錢
辻村太郎著	地 形 學		定價五圓貳拾七錢
丸毛信勝著	實用昆蟲學要義		定價參圓貳拾錢
神田茂著	彗 星		定價參圓八拾錢

發兌元

東京市外西大久保四五九番
振替東京三五三四〇番

古今書院

528

103

終